

日本列島の空中花粉飛散状況の推移—木本花粉—

○児塔栄子（(財) 日本アレルギー協会九州支部）、岸川禮子（国立病院機構福岡病院アレルギー科）、西間三馨（国立病院機構福岡病院、(財) 日本アレルギー協会九州支部）

目的：わが国の花粉症の予防と治療の情報提供を目的として、当施設で空中花粉を通年的に調査している。春のスギ、ヒノキ科花粉以外の木本花粉を対象にそれらの経年変化を解析して最近の特徴を見出し、環境の変化の指標となるかを検討する。

対象と方法：対象は1986年7月から15～18年間継続調査した全国14箇所の協力施設で採取された空中花粉である。方法は重力法のダラム型空中花粉捕集器を用いた。ワセリンを塗布したスライドガラスを毎朝一定の時間に交換して空中花粉が採取され、毎月当院へ郵送された。光学顕微鏡下で鑑別し、 1 cm^2 あたりに換算して集計した。観測されたマツ型、ブナ科、カバノキ・ニレ科、秋のスギ花粉捕集数について施設毎の年次変動を検討した。

結果：マツ科花粉はマキ科を含むマツ型花粉で表示しており、松江・相模原・新潟市において、年間平均数が約 $1000\sim 2800$ 個/ cm^2 で、九州では約 $80\sim 420$ 個/ cm^2 と少ない。マキ科はわずかに混じてマツ科が主に占めている。相模原・新潟市では減少傾向にある。カバノキ・ニレ科は、両科1部に類似した鑑別困難な花粉があり、合計して検討した。カバノキ科はハンノキ属、シラカンバ属、クマシデ属、ニレ科はケヤキ、エノキ、ムクノキ花粉を含む。浜松・富山・相模原市で年間平均は約 $360\sim 690$ 個/ cm^2 、九州では熊本市が 250 個/ cm^2 とやや多く、他は約 $100\sim 200$ 個/ cm^2 であった。熊本市と福岡市では減少傾向、高知・富山・新潟市では変化なく、他施設は増加傾向であった。ブナ科はブナ、シイ・クリ、コナラ属花粉を含む。大口・浜松・富山、相模原市では年間平均は約 $750\sim 1070$ 個/ cm^2 と多く、都城・熊本・福岡・新潟・仙台市では 400 個/ cm^2 以下であった。全国的に増加傾向で、半数以上の施設では、1995～97年にかけて倍増し、九州南部、松江市、和歌山市では著しい増加傾向が見られた。秋のスギ花粉は $2\sim 109$ 個/ cm^2 の平均の捕集数があり、浜松市が最も多く、次いで津市、高知市、九州南部で $14\sim 20$ 個/ cm^2 観測された。全国的にやや増加傾向があり、1994年、2000年には例年より2～8倍多く見られた。各花粉の年次変動はスギ・ヒノキ科と異なり、マツ科が最も小さく、次いでブナ科、カバノキ科・ニレ科の順であった。一方、秋のスギ花粉の変動は非常に大きい。さらに飛散開始日、ピーク時期、飛散期間などを調査し気象条件と比較検討して報告する（元厚生省花粉症研究班の協力施設により継続調査を行っている）。